様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年 6 月 24 日現在

機関番号：３８００２
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2010
課題番号：２０５６０６０９
研究課題名（和文）　南洋の日本植民都市における生活と空間に関する研究

研究課題名（英文）　A Study on Life and Space of Japanese Colonial Towns in Nan’yo

研究代表者
小野 啓子（ONO KEIKO）
沖縄大学・法経学部・教授
研究者番号：５０３６９２１１

研究成果の概要（和文）：
本研究は、第二次世界大戦前に旧南洋群島（ミクロネシア）で形成された日本植民都市の都市構造の特質や生活の具体的な様子を明らかにしている。南洋庁官舎に住む家族、商業者、沖縄出身の漁民など、さまざまな立場の日本人と現地住民が町の中でどのように暮らしていたのか、当時を記憶する人々の聞き取り調査や当時の生活を物語る写真、文献などの資料収集を行い、太平洋における日本型植民都市の都市像をハードとソフトの両方から総合的に描き出した。

研究成果の概要（英文）：
This research focuses on the urban morphology of Japanese colonial towns in Nan’yo Gunto (Japanese mandated Micronesia) before World War Two, how it evolved as a built environment and how residents experienced living in the towns. It examines the life of various groups of Japanese including Nan’yo-cho officials, small business owners, fishermen from Okinawa and others as well as the urban experiences of the local people, based on interviews of the elderly both in Japan and Micronesia, photographs, statistics and contemporary literatures. The research is a part of an attempt to understand how the Japanese brought the urban development to the Western Pacific before World War Two.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	1,000,000	300,000	1,300,000
２００９年度	700,000	210,000	910,000
２０１０年度	200,000	60,000	260,000
年度			
年度			
総　計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：都市史
科研費の分科・細目：建築学・建築史・意匠
キーワード：南洋群島、ミクロネシア、植民地、都市史、南洋

１．研究開始当初の背景

明治期から第二次世界大戦までの間、いわゆる「南進論」を背景として、様々な日本人が「未開拓」であるとされた沖縄ー西太平洋地域への経済進出を試みた。初期の事例として、19 世紀末の豪州トレス海峡木曜島で真珠貝採貝業に従事した日本人セトルメント、20 世紀初頭よりフィリピン・ミンダナオ島ダバオで、アバカ麻栽培に従事した日本人セトルメントがある。同じ頃、沖縄県南大東島では、八丈島出身の玉置半衛門が上陸し、糖業による無人島の開拓に着手する。さらに同時期、日本最初の植民地となった台湾では、創設されたばかりの台湾製糖が最初の近代的製糖

工場を高雄北部に建設し、その後 40 数年にわたり台湾経済の牽引役となる糖業経営が始まった。1914 年にはドイツ支配下にあったミクロネシアを日本が占領し、1922 年には正式に国連の委任統治領南洋群島となる。台湾糖業の成長限界を見越した松江春次はただちに北マリアナ諸島サイパン島での糖業開発に乗り出し、数年のうちにテニアン島、ロタ島などに事業を拡大する。パラオでは漁業が盛んになり、1930 年代後半ー1940 年代初めには 10 万人近い日本人がミクロネシアで生活し、その６割を沖縄出身者が占めていた。

研究代表者はこうした太平洋地域における戦前期日本人セトルメント建設の流れを博士論文としてまとめた。さらに、北マリアナ諸島の日本型糖業タウンに関する分析、南洋群島を統治した南洋庁の置かれたパラオ諸島コロールについての分析を論文にまとめている。また、明治期の台湾の糖業プランテーションタウンモデルの確立についてもまとめている。

しかし、これらの一連の研究の力点は都市形成過程、都市構造、土地利用の分析にあり、当時の人々（日本人及び現地住民）の生活が十分に描かれているとは言えない。本研究では、これらのセトルメントの「暮らし」に焦点をあて、内地出身者、沖縄出身者、社宅居住者、農民、現地住民など、当時を記憶する人々の聞き取り調査や当時の生活を物語る資料収集を行い、太平洋の日本型植民都市の都市像をハードとソフトの両方から総合的に描き出したいと考えた。

２．研究の目的

第二次世界大戦前に旧南洋群島で形成された日本人町は戦後消滅し、断片的な記録（記憶）しか残っていない。本研究の目的は、これらの日本人町において、内地出身者、沖縄出身者、現地住民などが、それぞれの立場で体験した当時の生活を、より具体的・ビジュアルに描き出すことによって、ハード（都市構造）とソフト（暮らし）を一体化させた太平洋の日本型植民都市像を明らかにすることにある。

３．研究の方法

(1) ミクロネシア現地調査

サイパン、ロタ（以上北マリアナ諸島）、ヤップ、チューク、ポンペイ、コスラエ（以上ミクロネシア連邦）、マジュロ及びジャルート（以上マーシャル諸島）において、戦前の様子を知る現地住民に聞き取り調査を実施した。また、日本人町跡の現地調査、資料収集を実施した。

(2) グアム、ハワイ文献調査

ビショップ博物館アーカイブ（ホノルル）、グアム大学ミクロネシア地域研究センターで資料収集（特に戦時中の航空写真と戦前の地図）を行った。

(3) 沖縄調査

沖縄ポナペ会、テニアン会、うるま市教育委員会等の協力を得て、戦前の南洋群島居住者の聞き取り調査を実施した。テニアン、ポンペイ、コスラエからの帰還者の他、とくに漁民（糸満→ポンペイ、津堅島→チューク諸島）の聞き取りを重点的に実施した。津堅島では６名の80代以上の高齢者にトラックへの漁業出稼ぎの状況について聞き取りを行うことができた。また、衣食住の様子がわかる家族写真等の資料を新たに収集した。

(4) その他の国内調査

戦前のパラオ、チューク、ヤップ等の南洋庁関係者の聞き取り調査を実施（東京都内、横浜市内、大分市内、京都府内等）した。また、衣食住の様子がわかる家族写真等の資料を収集した。

(5) 都市構造の分析

トノアス（チューク諸島）、ジャルート（マーシャル諸島）、コロニア（ポンペイ）等の地図、土地利用図を作成した。

４．研究成果

(1) 旧南洋群島の都市構造と日本人セトルメント形成の全体像の分析

旧南洋群島の中で、特に北マリアナ諸島、パラオ諸島といった日本人移民が集中した地域に加え、チューク、ポンペイ、コスラエ、マーシャル、ヤップの日本人セトルメント形成の状況について比較分析を行い、太平洋地域における日本型の植民都市形成の全体像を明らかにした。主要な町については、地図作成や土地利用の分析を行った。

(2) 旧南洋群島の各日本人町での生活像：

内地出身者（サイパン、テニアン、ヤップ、チューク、パラオ居住経験者）、沖縄出身者（チューク、ポンペイ、コスラエ、パラオ居住経験者）、現地住民（サイパン、ロタ、ヤップ、チューク、ポンペイ、コスラエ、ジャルート出身者）の聞き取りを行い、複数の立場から旧南洋群島の日本人町の生活の様子を明らかにした（特に衣食住について）。

(3)トラック（現チューク）諸島の日本人町及び漁業セトルメントの特質分析

1914年のドイツ領ミクロネシアを占領後、日本はトラック諸島夏島（現チューク諸島トノアス島）に臨時南洋群島防備隊本部を置きミクロネシアの統治を開始した。しかし、1920年代初めには行政の中心は南洋庁が設置されたパラオ諸島コロールに移った。まとまった平地がないトラック諸島には際立った産業もなく、在住日本人数は長年の間、数百名に留まっていた。しかし、1933年に日本が国際連

盟を脱退した頃から空港、港湾などのインフラ整備が活発に行なわれ始め、夏島を中心に建設ブームが訪れる。また、鰹節の製造も盛んとなり、多くの沖縄県人がトラック諸島に移住した。1940年代に入ると連合艦隊の司令部が夏島に置かれ、太平洋戦線の補給基地としてトラック諸島は最盛期を迎える。本研究では、こうしたトラック諸島の中心であった夏島について、都市構造とその特質を明らかにした。

■夏島の軍事基地化

夏島及び周辺の島々に劇的な変化をもたらしたのは、第二次世界大戦開戦前後の徹底的な軍事基地化である。前述の１万坪の大運動場は完成の１年後、1941 年には兵舎用地とされた。さらに、1942 年のラバウルの占領後、トラック環礁は海軍にとって、本国と前線をつなぐ重要な泊地となり、同年後半には海軍連合艦隊第四艦隊の基地となった。夏島は全周を取り囲むマングローブ林を次々と埋め立て、水上機基地、重油保管タンク、航空燃料保管タンク等が設置された。また、海軍専用の病院が、夏島の北側のクツワ村に建設された。竹島飛行場は拡大整備、春島にも２千メートルの飛行場（1941 年 11 月着工、1942 年完成）、楓島に飛行場が設けられた。島々の各所に要塞砲が設置された。

1941 年に夏島を訪れた中島敦は、「人夫等の多い騒々しい街で大嫌いだ」と記している。1940 年代初めのトラックでは、漁業ブームの陰りで漁業関係者はやや減少傾向にあったが、軍事基地化の進行に伴い建設労働者が増加していた。馬淵組は、横須賀にあって海軍関係の工事で成長した会社であるが、1914 年より海軍の基地や付属施設の建設を請け負っていた。マーシャルからパラオまで広い範囲で作業員の供給などをやっていたが、その中心の出張所は夏島においた。２階建て木造のオフィスが 50 人近い社員を統括していた（馬淵組）。竹中工務店も支店を置いている。

横須賀の料亭の支店である「小松」の他「南華寮」など、海軍御用達の料亭ができ、将校クラスの接待や会談に使用された。海軍士官クラブ「水交社」も設置され、そこでは宿泊やカレーライスなどの食事ができた。戦艦大和はあまり戦線に参加することなく沖に停泊を続け、居住性がよかったことから、「大和ホテル」と揶揄された。司令部の食事では、黒塗りの膳に鯛の刺身や冷たいビールが出されたという。

日本の真珠湾と呼ばれたトラック諸島であったが、大型船の着岸できる岸壁やドックなどの船舶修理施設はなかった。しかし、環礁内の規模は広大で、春島泊地には常に軍艦５０隻、夏島の反対側には大小の船団２００隻が停泊、航空母艦が航走しつつ飛行機発着艦の訓練ができた。

沖に停泊する「艦隊の兵士にとっては、上陸が唯一の楽しみ」であり、１ヶ月に１回、４分の１ずつ、前日に大騒ぎでアイロンをあててぱりっとした制服の海軍兵士が町の中を歩いた。また、「夏島では夕方までテニスをして、咽喉をカラカラにしてからビール」を飲むのを楽しみにしていた士官たちもいた。

1930 年代の初めには自動車はなく、自転車さえもほとんどなかったが、基地化に伴いタクシー会社も登場した。桟橋周辺から南貿を始めとする商店が建ち並んでいた。

夏島の公学校の寄宿舎の下には大城農場と呼ばれる広い畑があり、沖縄出身の大城氏が野菜を栽培し、牛車で商店などに販売していた。肥やしは寄宿舎などから汲取り、服装は質素だったが、２階建ての家を建て、成功者だったという。戦時期になると、軍に供給する野菜をつくる農場を営む沖縄出身者は多かった。町の中では泡盛製造所が２軒、漁業から転身し、料亭や食堂の経営に携わる沖縄出身者も見られた。料亭で働く女性たちにも沖縄出身者は多かった。

トラック諸島には陸軍も配備された。1943 年までは52分隊の300人だけだったが、1944 年1月には満州から14,000人が加わり、この時期には、北マリアナやパラオに匹敵する日本人人口がトラックを滞在拠点としたことになる。しかし、軍事基地化に伴い急成長した町は、1944年2月の米軍による空襲によって壊滅的な被害を受け、その短い繁栄は終わった。

■夏島町のトラック人

トラック人の住まいは町の周辺の山側に多かったが、各島の名前をつけた宿泊所が５、６軒町の中にあった。また、公学校のすぐ下にあった寄宿舎では環礁の他の島々から補習科に進むために来た子供たち（４−５年生）が数十名住んでいた。寄宿舎では米やみそ汁を食べ、学校が終わると日本人の家庭（南洋庁の役人の官舎）に手伝いに行き、毎月 2、３円ほどの小遣いをもらうことができた（校外練習生）。また、中には日本人の経営する料亭や商店に住み込み、手伝いながら公学校に通う子供もいた。日本人家族と一緒に米やみそ汁、煮付けなどの食事を食べ、小遣いをもらう。アイスケーキやまんじゅう、あんぱん、かき氷などの値段は安く、子供たちはもらったお金でいろいろなものを店で買えた。

鰹船が帰って来る夜、トラック人の子供たちが歩いて南興水産まで行き、作業台の横で作業を手伝うと、沖縄の人たちが鰹のハラゴ

や頭をくれる。これを明け方持ち帰り、料理して食べるのは楽しみだった。

公学校を卒業した子供たちの一部は、日本人の店や南貿で住み込みで働いた。多くは10円前後の給金だったが、ハンコ屋で印鑑を彫る技術を身に付けたヨシワ・スカ氏は、100円という高い給与をもらっていたという。

映画館では毎日日本映画が上映されていて入場料は安く、トラック人にも人気だった。トラック人も食堂でライスカレーや肉丼や沖縄そばを食べたり、床屋でたっぷりとポマードをつけておしゃれをしたり（床屋は7軒あった。1939年）、様々な都市的な娯楽を楽しむこともできた。夏島のトラック公園での運動会は島対抗の大イベントで、小さい子供から大人、老人まで参加し、優勝旗を競い合った。相撲も人気で、月曜島出身の強いトラック人は日本まで遠征した。1930年代後半から1940年代の初めにかけて、夏島は、トラック人にとってかなり都市的な生活を経験できる場所となっていた。

■漁業基地としてのトラック諸島

1939年の時点で、トラック支庁管内の日本人人口の3,650人のうち、1,972人（54%）が夏島以外に住んでいた。主要な島では、水曜島に677人、秋島に473人、春島に168人の日本人が住んでいた。他の島は、数十名単位の小規模な拠点で、一部貿易関係者、公学校など教員とその家族を除くとほとんどが鰹漁を営む漁業関係者である。また、日本人人口の2,596人（71%）が沖縄県人であり、漁業関係者の圧倒的な多数を沖縄出身者が占めていた。

沖縄出身者によるトラック諸島での漁業は、1917年に糸満出身の玉城松栄が雑漁業を始めたのが最初と言われている。さらに玉城は1925年にサイパンから中古船を購入して鰹漁業を開始し、最盛期には9隻を所有した。玉城は水曜島を拠点とした。1939年にはトラック支庁内の水産業者の業主は88人、被雇用者は1,629名に上っている。鰹漁は1930年代の後半に最も活況を呈した。

トラックに多くの出稼ぎ漁民を送り出した沖縄の地域の一つとして、津堅島があげられる（この他、慶良間諸島、本部、宮古など）。1924年頃に津堅島出身の伊覇真牛が秋島在住の勝連出身の親戚のもとに行き、小規模漁業を行うようになった。伊覇真牛は津堅島出身の他の数名と1930年に鰹船を建造し、鰹漁と鰹節加工業に着手する。これが順調に行き、津堅島から次々と人を呼び寄せた（男性だけでなく、加工業に従事するため女性も家族ぐるみで出稼ぎに来た）。やがて、津堅島出身者の組合が増え、秋島、春島、火曜島、水曜島を拠点に鰹船を操業し、各組合が所有する製造所で鰹節の加工を行った（トラックでは鰹船はそれぞれ組合で操業し、船と製造所がセットで鰹の捕獲から鰹節の生産まで一貫して行った）。

津堅島は半農半漁の小さな離島であったが、トラックに延べ数百名の出稼ぎ漁民を送り出した。鰹船が帰って来ると、製造所担当の男性たちと女性たちは頭を切って内蔵を取って窯ゆでにし、骨を抜いて干すための作業を夜遅く明け方まで行った。途中で傷ついた節にはすり身にした鰹を塗り込んでなめらかにして仕上げていく。鰹のあらを捨てるので、製造場の回りは非常に汚く臭かった。

独身の労働者は製造所の周辺に設けられた簡素な木造の共同宿舎に住み、世帯持ちは10坪（30平米）くらいの小さな家に暮らした。井戸を掘り、雨水を貯めて水を確保し、お風呂はドラム缶だった。服装はシャツやズボンで簡素だった。食事は、米や芋、宿舎のまわりで育てた野菜にカツオを刺身や煮付けにして食べていた。米や泡盛、たばこ以外はほとんど自給自足の生活である。夏島などの町に行く機会も限られ、島民とのつきあいもほとんどなかった（若者は島の女性と所帯を持つ事があった）。学校があるところはほとんどなく、学齢期の子供は沖縄へ送り返した。お金を使う店も娯楽もなく、簡素な生活で貯まるお金を郷里に送った。

津堅島では戦前「トラックがあったから、盆と正月に人参を売るだけで暮らして行けた」という。送金は、日々の暮らしだけでなく、年下の兄弟たちの教育（師範学校、農業学校などへの進学）など人的投資に活かされた。1940年頃には津堅島から中学へ進学した生徒の数は村の中では突出し、大学への進学者も村で一位であった。1940年代初頭の若者の渡航の場合、徴兵忌避という目的もあった。戦前鰹節製造所のほとんどは、個別の船（組合）によって設置された。1942年頃には鰹船は軍に徴用されて運搬船となり、鰹漁はできなくなった。

■まとめ（トラック諸島）

第一に、夏島は海軍による基地化によって支えられた「日本人町」であった。太平洋戦争開戦前には基地建設と同時に社会基盤整備が進められ、開戦後は数万人の兵力が駐留する補給基地であった。

第二に、その中心だった夏島町は、北マリアナ諸島のガラパンやパラオ諸島のコロールなどの都市と同様に、小さいながらも官舎街、商店街、歓楽街といった3つの主要素を備えた日本人町であった。

第三に、沖縄県出身者は日本人人口の約７割を占めていた（６支庁の中で最も高い割合）。しかし、その大半は鰹漁に従事しており、トラック諸島の至る所に製造場と呼ばれる小さな拠点を築き自給自足的な暮らしをしていたため、夏島町との直接的な関わりは薄かった。

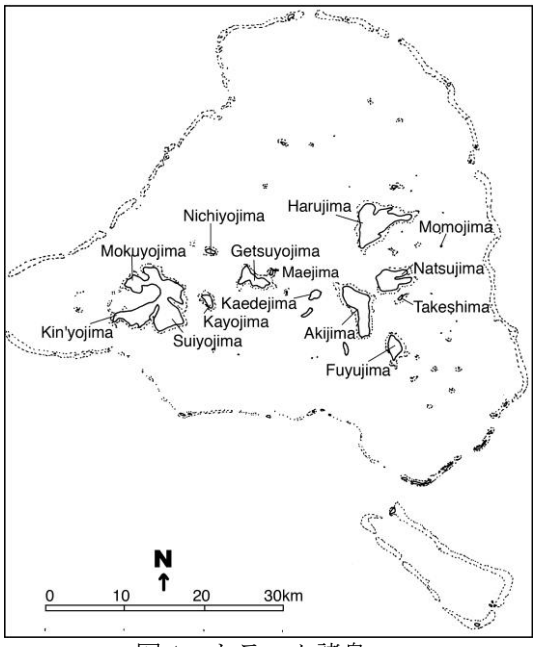
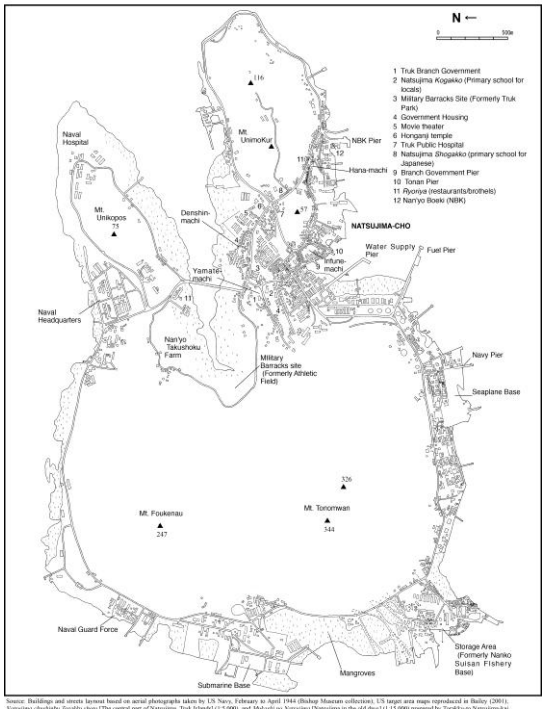


図１　トラック諸島

表１　トラック諸島の人口構成の推移
（1920-40）

	19 20		19 25		19 30		19 35		19 39**		19 40	
	Number	%	Number	%	Number	%	Number	%	Number	%	Number	%
Natsujima Total*	1,901	100.0%	1,582	100.0%	1,689	100.0%	2,375	100.0%	3,049	100.0%		
Local	1,340	70.5%	1,337	84.5%	1,335	79.0%	1,584	66.7%	1,366	44.8%		
Japanese***	560	29.5%	242	15.3%	351	20.8%	788	33.2%	1,678	55.0%		
Others	1	0.1%	3	0.2%	3	0.2%	3	0.1%	5	0.2%		
Truk Branch Total	15,394	100.0%	15,317	100.0%	15,972	100.0%	17,133	100.0%	19,036	100.0%	18,890	100.0%
Local	14,788	96.1%	14,961	97.7%	15,200	95.2%	15,129	88.3%	15,358	80.7%	14,734	78.0%
Japanese***	601	3.9%	347	2.3%	749	4.7%	1,980	11.6%	3,650	19.2%	4,128	21.9%
Others	5	0.0%	9	0.1%	23	0.1%	24	0.1%	28	0.1%	28	0.1%

Source: Japanese Population Census 1920-1935; Nan'yo-cho (1941b).
*For 1920 population of Natsujima includes those on Takeshima and Momojima.
**Data on 1 October except 1939 (31 Dec).
***Japanese' include those from Sakhalin, Korea and Taiwan.



Source: Buildings and streets layout based on aerial photographs taken by US Navy, February to April 1944 (Bishop Museum collection), US target area maps reproduced in Bailey (2001), *Natsujima chosakyo Torakku shoto* [The central part of Natsujima, Truk Islands] (1:5,000) and *Mokoshi no Natsujima* [Natsujima in the old days] (1:15,000) prepared by Torakku-to Natsujima-kai [Truk Island Natsujima Association], 1970; Topographic Map of Moen, State of Truk (Chuk), FSM (1:25,000), produced by the United States Geological Survey, 1983.
Fig. 3 Natsujima in 1944.

図２　1944 年頃の夏島

Fig. 4 Landuse in Natsujima in the 1940s.

図３　1940 年代の夏島の土地利用

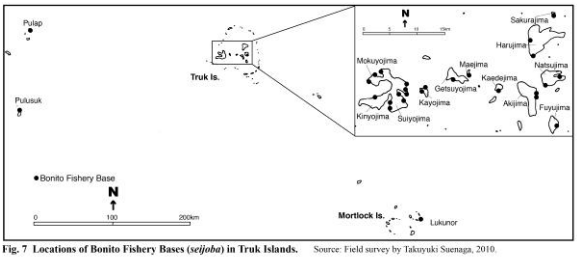


Fig. 7 Locations of Bonito Fishery Bases (*seijoba*) in Truk Islands. Source: Field survey by Takuyuki Suenaga, 2010.

図４　トラック諸島の鰹節工場の分布図

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計１件）
小野啓子、「第二次世界大戦前の日本型糖業セトルメントの特質：台湾と南洋群島の比較を通して」、人間文化研究機構連携研究共同研究プロジェクト「ユーラシアと日本：交流と表象」移民史の比較研究班沖縄シンポジウム「沖縄移民研究の現状と課題−戦前日本の勢力圏を中心として」、2009 年 3 月 18 日、沖縄大学

６．研究組織
(1)研究代表者
小野 啓子（ONO KEIKO）
沖縄大学･法経学部法経学科･教授
研究者番号：50369211

(2)連携研究者
安藤 徹哉（ANDO TETSUYA）
琉球大学･工学部環境建設工学科･准教授
研究者番号：60222783